

# 信濃川中流域の遺跡遺物

——新潟県小千谷市内における考古学的調査——

中川 成夫  
岡本 勇  
加藤 晋平

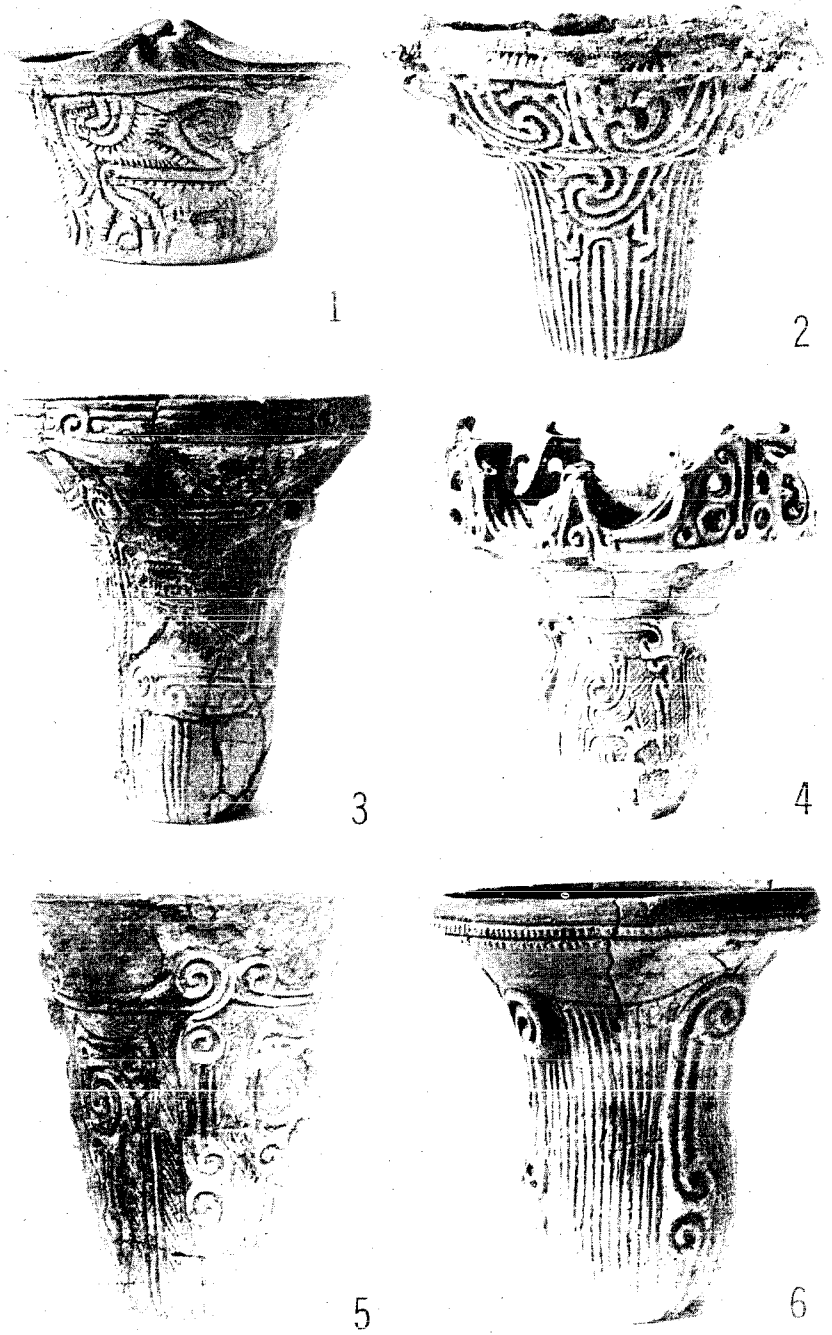
## 一 はじめに

甲武信国境より発し、信濃をいくつかの平野をうるおして越後に入る信濃川は、妻有郷を経て、小千谷付近から平野部を形成しつつ、新潟で日本海にそそいでいる。

この越後における流域の考古学的調査に私たちが関与するにいたつたのは、昭和三年、県教委主催による、妻有郷の総合調査に始まる。中川は異友芹沢長介氏らと共に上流域の考古学的調査を行い、その結果を報告した。引続き三四年には、十日町市教委の委嘱により、同市小坂遺跡の調査を行い、その報告書を三六年に刊行した。敢ては、一つの地域研究として、この流域の調査を行いたいと願っていたところ、三七年にいたつて、小千谷市史編さん会が結成され、中川はその委員の一人に任命され、同年七月、同市内の遺跡若干を踏査した。小千谷市は面積一五四平方キロ、人口約五万、旧北魚沼、中魚沼、

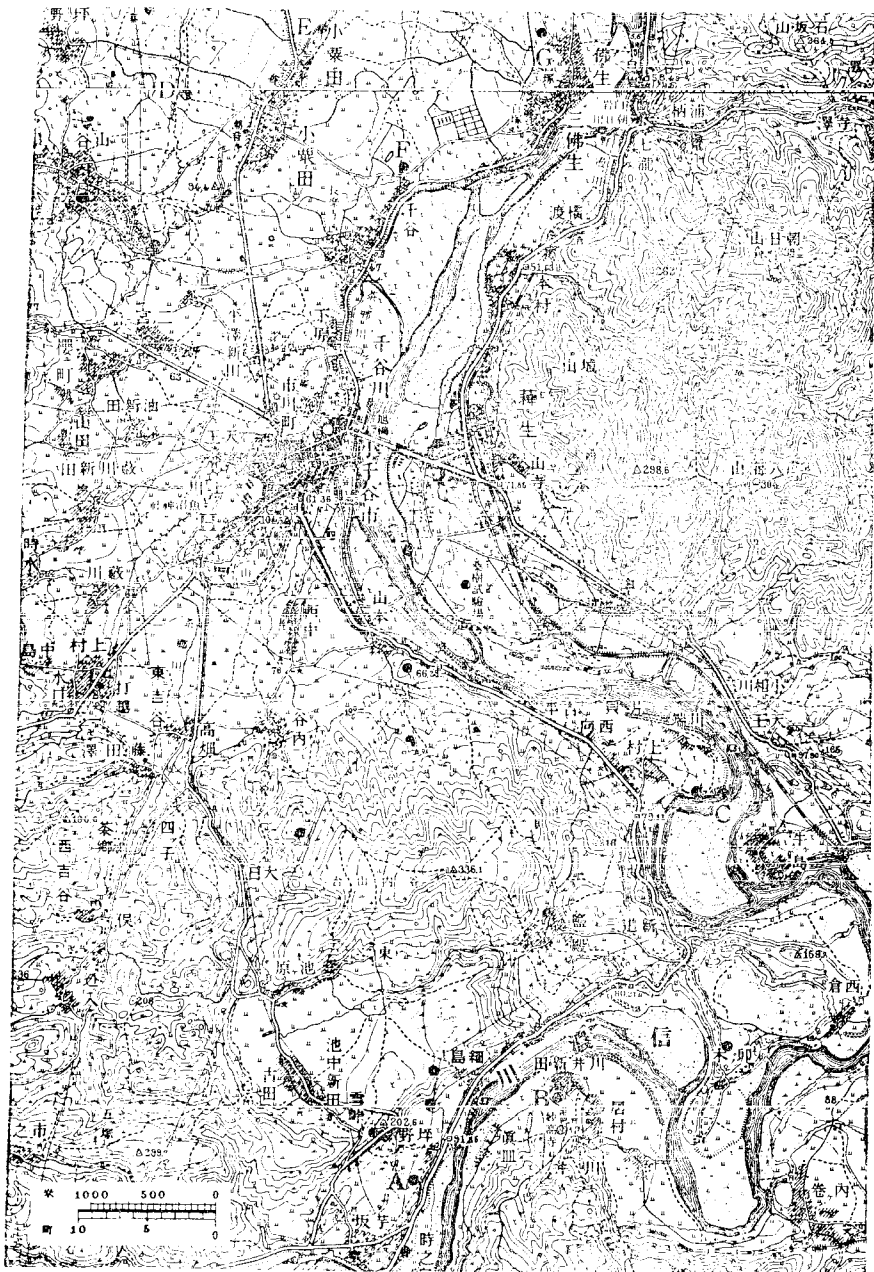
吉志、三島の諸郡にわたる町村を合併した新市であるが、延喜式にみえる「越後布」の後身縮の産地として古来知られ、傍名抄にも千屋郷としてみえている地が市の中核をなしている。この広い市域には縄文時代から中世にいたるまでの遺跡が存在しており、その調査研究には現在も安達吉治氏が献身的に努力されてきている。私たちは、市史編さん事業への協力と、本学考古学実習との意味をかね、三八年五月初旬、約五日間に亘つて、あうかぎりの遺跡遺物の実査を行い、中流域における考古学研究的基礎的資料の把握を試みた。この調査には私たちの他本学先生、高野安、山日和男、小林浩子、吉政幸子の他、駒沢大学々生西家稔の諸君が参加した。以下にのべる資料はこれらの諸君の整理の結果に負うところ多いことを記し、感謝の意を表する。

次に調査内容についてのべる。



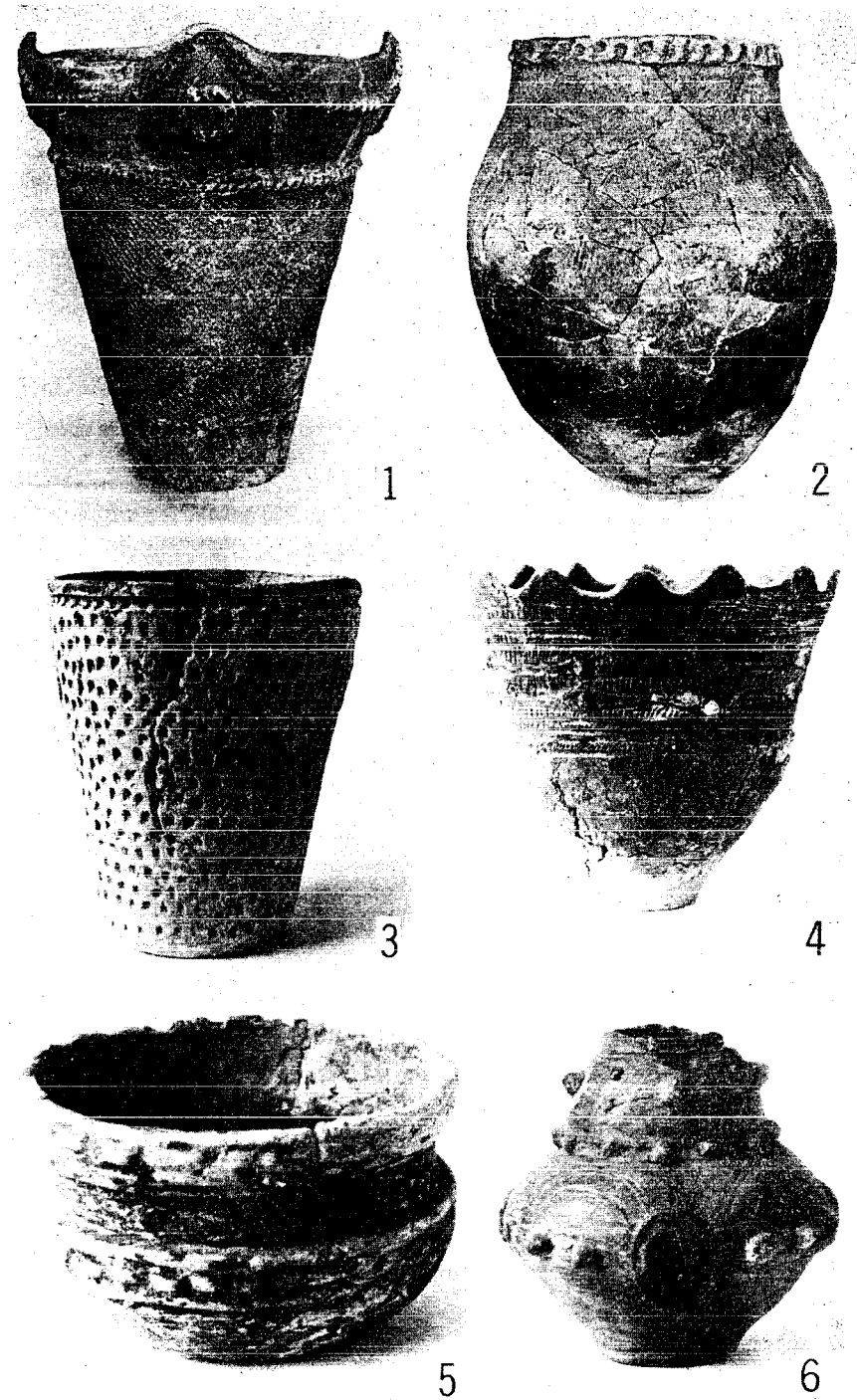
図版一、中期縄文式土器（安達吉治氏蔵）

（解説本文末尾）

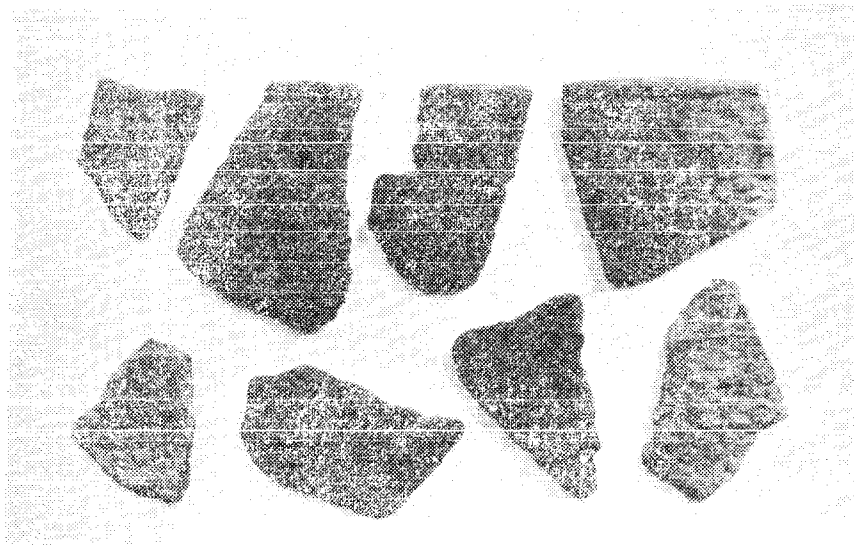


第1図 小千谷市内の遺跡（アルファベットの付されたものは第四に紹介した）

図版二、後・晩期縄文式土器（安達吉治氏蔵）



（解説本文末尾）



第2図 芋坂下蟹沢遺跡と出土の捺型文土器（大淵敏夫氏蔵）

### 二 いままでの調査研究

信濃川の中流域を占める小千谷市域内には、多数の遺跡があり、これらの存在が注意にのぼったのは、かなり古いことである。すでに明治年代には、若林勝郎、大野延太郎、江見忠功、佐々木鯉山などの諸氏による紹介があり、一〇数カ所の遺物の発見地が報告されている。ついで大正時代に入ると、魚沼無口・大泉久四郎氏等がさらに多くの遺跡をあきらかにされ、おおよそ三〇カ所にかきい場所が知られるにいたった。<sup>2)</sup>これらのすべてはいわゆる石器出土地、つまり石器時代遺跡であり、ほとんどは縄文時代のものとみなすことができる。けれども、この多数の遺跡も、たんにその地名と出土遺物が紹介されたのみで、なほいっぺん研究はまったくおこなわれなかった。もちろん、この当時、地方において正規な発掘調査をおこなおうとする意識も条件も、あつちの意味で乏しかったことを指摘しなければならぬ。

昭和十二年五月、首藤秀平氏による『新潟県に於ける石器時代遺跡調査報告』(新潟県史蹟資料館調査報告第七輯)が刊行されたが、これは県内の縄文時代・弥生時代の遺跡を集成大成した、すなわち労作である。このなかには、小千谷市内二八カ所の遺跡が列記され、その出土土器のいくつかにいっしては、芋坂式――羽状縄文式――坪穴式――長者ヶ原式――塔ヶ崎式――三十稲場式――三仏生式――石倉式などの型式編年にもとづく分類がなされている。この編年のなかの芋坂式土器は旧真人村芋坂下蟹沢出土の捺型文土器を標式として名づけられ

たものである。芋坂出土の楕円捺型文土器は、その前年八幡一郎氏によって発表されたが、このころ捺型文土器にたいする学界の関心はつよく、その分布を北へ延長せしめたという意味とあいまって、少なからざる注意をひきおこした。<sup>3)</sup>なお、縄文時代の後期の後半に位置づけられた三仏生式土器も、旧千田村三仏生の土器を標式とするものである。

第二次大戦後は、二、三の遺跡で発掘調査がおこなわれた。三仏生遺跡は、はやくからその存在が知られ、沢山の遺物もつめられていたが、その後いわゆる三仏生式土器の標式遺跡として首名となった。昭和三年八月、長岡市立科学博物館による発掘がおこなわれ、多数の遺物が出土した。そして、このとき出土した土器の研究により、三仏生式土器の内容はいっぺんおあきらかとなった。<sup>4)</sup>また、旧真人村大平遺跡の発掘調査は、昭和三十一年の八月、小千谷市教育委員会の主催によって進められた。ここでは、縄文時代中期末の竪穴住居址が発見されるなどの成果があつた。<sup>5)</sup>

いま、小千谷市域における考古学上の調査研究の歩みをかえりみるにあたって、地元の研究愛好者が水準にわたって申しあげた役割をのみがすことばできない。古くは、まず安達衝松氏の名をあげるべきであろう。旧片貝村片貝にて醸造業をいとなむ安達氏は、かたわら付近地域の遺物を蒐集し、研究の用に供した。かれは、「吾等は地方に在りて遺物遺跡の発見発掘に努め、中央学者の総合的研究に供し、以て考古学上の目的達成に資したい」と語っているが、おそらくこの謙虚な考えは他のす



第3図 浸蝕されつつある明神遺跡(西南より)

へての人にも共通するものである。また、近藤勘治郎氏の業績については、あらためて述べるまでもないであろう。近藤氏は長岡市関原に居住していたが、とく「片貝、高梨、三仏生等の諸遺跡まで足を延ばし、(中略)殊に小千谷市真人芋坂遺跡の縄文早期押型土器研究には、八幡一郎、三森定男氏の応援を求められて熱心に調査研究された」といわれる。芋坂の捺型土器をめぐって思い出されるのは、大淵金司氏のことである。芋坂に住むかれは、その周辺の地をくまなく踏査し、下蟹沢の捺型土器をはじめ、多くの遺跡遺物を発見したが、第二次大戦で惜しくも戦死された。以上の方々は、いずれも故人であるが、その学問的な生命は、蒐集されたもの言わぬ遺物のなかに、いまなお生きつづけている。

現在、小千谷小学校に勤務する安達吉治氏は、跋涉いたざるところなく、新しいいくつかの遺跡をあきらかにし、また莫大な量の遺物を採集された。採集品は全市域におよんでいる。このコレクションと知見なくしては、小千谷市域の原始・古代の歴史を語ることはできない。私たちが、この稿をまとめるにあたっては、その大半の資料を安達氏から御がねばならぬ。この他、学界には名もなき善意の人たちの協力を、忘れてはならず、ともに今日の研究の基礎を築き立てているのである。

### 三 遺跡の分布

日本の屋根といわれる長野県の、その北を流れる千曲川は、新潟県に入ると名をあらためて信濃川となる。信濃川は、救

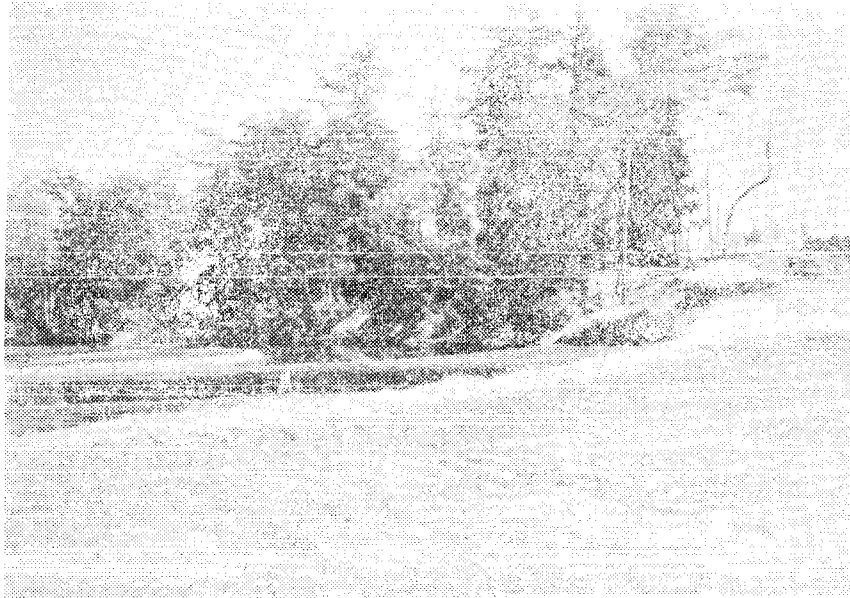
(1)キロメートルほどつづいて、長岡付近から沖積地(蒲原平野)を流れることになるが、この間にはなん段かの大きな河原段丘が発達している。信濃川と河原段丘がおりなす地域は、古い時代の人々にとって、比較的住みよい条件をそなえていたであろう。私たちはたしかにその遺跡の分布から、そう考える。この信濃川流域のうちでも、とりわけ現在の蒲原平野に接した地域や、魚野川との合流点付近には、かなり濃密な遺跡の分布が知られている。いま、その地域を大きく占める小千谷市内の遺跡についてとりあげてみよう。

『日本石器時代地名表第五版』、『新潟県に於ける石器時代遺蹟調査報告』、中村孝三郎・浅田莊太郎・安達吉治氏による地名表(『三仏生』所収)、ならびに安達吉治氏作製の地名表(『大平遺跡』所収)、および安達吉治・大淵敏夫両氏の「指示、さらに私たちの調査の結果などを総合し、検討を加えると、およそつぎのような遺跡を列記することができる。

- 岩沢、岩山 中期(加曾利EⅡ併行)、後期(堀之内Ⅰ併行)
- 〃 山谷 中期(馬高・加曾利EⅡ併行)
- 〃 島 中期(剗野B・加曾利E併行)、後期(三上橋場)
- 真人、三木明 後期(三仏生)
- 〃 陣ヶ幸 中期
- 〃 白坂 中期
- 〃 大平 中期(加曾利EⅡ・田併行)
- 〃 芋坂、下蟹沢 早期(捺型文)、前期(剗野)
- 〃 稲荷堂 中期(馬高・加曾利E併行)、後期(堀之内

#### 工併行)

- 真人、中原 中期(馬高・加曾利E併行、後期(三上橋場
- 〃 下ノ開農 中期(馬高・加曾利E併行)
- 〃 八幡様 中期(古)
- 〃 縄首堂 中期(新)、後期(堀之内Ⅰ併行)
- 〃 芋坂、上ノ蟹沢 早期(田戸上層併行)、前期
- 〃 墓地ノ下 中期(新)
- 〃 林中 中期(新)
- 〃 大北沢 中期(新)
- 〃 上ノ開農 中期(古・新)
- 山辺、細島 中期、後期(三上橋場・三仏生)、須恵器
- 〃 坪野、雪峠ノ下 前期(諸磯a)、中期(古・新)、後期
- 〃 古田、大石畑 早期(捺型文)、中期(新)
- 〃 細島、獅子ヶ平 中期
- 〃 坪野、上ノ原 中期
- 〃 細島、塞ノ神林 中期
- 〃 池ヶ原、吉田 中期
- 川井、川井新田 早期(捺型文・田戸上層併行・茅山)、前期
- 〃 妙高寺裏 早期、中期、後期
- 〃 塩殿、館野 時期不詳
- 〃 西倉、岩平 晚期
- 〃 卯ノ木、上原 中期(古)



第4図 権田窯址と小栗田出土の須恵器 (安達吉治氏蔵)

谷内、中平 時期不詳  
 上片貝、矢原 中期(馬高・加曾利E I併行)、後期(三十稲場)  
 〃 明神 後期(三十稲場・堀之内I II・新)、晩期(大洞B・BC・A)  
 由未、由未 中期(古・馬高・加曾利E)  
 木清、大清水 中期(新)  
 中子、元中子 中期(馬高)、後期(三十稲場・三仏生)  
 前原、前原 中期  
 塩谷、宮脇 中期(新)  
 上ノ山、上ノ山 後期(三十稲場・三仏生・新)、晩期(大洞B・BC)  
 小千谷、船岡山、預 時期不詳  
 下原、下原 中期(馬高・加曾利E I併行)  
 塩谷、宮ノ脇 中期(新)  
 西ノ子、天神山 中期(新)  
 山谷、城ノ吉 中期(馬高)、後期(三十稲場・堀之内II)  
 〃 源藤六 後期(三仏生)、晩期  
 〃 前野 中期(馬高・加曾利E併行)  
 小栗田、清水尻 須恵器、土師器  
 〃 庄司面 須恵器  
 〃 権田 須恵器(窯址)  
 〃 館清水 縄文以前  
 千谷、鶴ヶ丘 中期(新)、須恵器、土師器

〃 岡林 須恵器(蔵骨器)  
 〃 道金原 後期(三十稲場)  
 三仏生、清水上 早期(捺型文)、中期、後期(三十稲場・三仏生)、晩期(古)、弥生式土器  
 高栗、青池 後期(新)、晩期(大洞B・BC・CI)  
 〃 平沢 後期、晩期、須恵器(窯址)  
 片貝、寺社福 中期、後期  
 〃 腰沢 中期(古・新)、後期、晩期  
 〃 小由畑 時期不詳  
 〃 渡三橋 中期(新)、後期(三十稲場・堀之内I)  
 〃 十三畑 中期、後期  
 〃 大原牧 後期(三十稲場・堀之内I)  
 〃 町裏 晩期(新)  
 〃 延命寺原 中期(新)、後期(三十稲場・新)  
 〃 魚無沢 後期(三仏生)  
 〃 前原 中期、後期  
 〃 池津 中期(新)、後期(三十稲場)  
 \* 以上の遺跡の大部分は縄文時代の遺物出土地であり、その時期をあらわすのに早期、前期、中期、後期、晩期の区分を用いた。またさらに、その細分が可能なものについては、土器型式名あるいは古・中・新の階級名をもって分類した。他の時代、すなわち須恵器、土師器などの発見地については、厳密な分類が困難なので、たんに土器名のみをかかげておいた。なお、地図上の位置の不明のものがかなり多く、第1図



第5図 館清水遺跡と出土の石刃（須田春治氏蔵）

には安達吉治氏の教示によって、確実なものの一部をマインドした。

これらの遺跡の分布からわかるように、ほとんどすべての遺跡は、河岸段丘上に位置している。約70カ所の遺跡のあり方を地図上になると、ほぼ線状の分布を示しているが、これは信濃川にさう河岸段丘と関連をもつからにはかならない。しかし、なかには福谷・宮脇遺跡のように狭谷山塊（仮称）丘陵部の山間に存在するものもある。河岸段丘は数段にわたって認められるが、最下位の段丘（大部分は水田となっている）には遺跡の存在は知られていない。それより上位、つまり第二段丘以上には、いずれからも遺物が出土しており、とりわけ第三・第四の段丘に多くみられる。一方、真人・大平・谷内・中平、四ツ子・天神山などの遺跡は、高位の段丘にあり、いずれも縄文時代中期に属する。

これらの遺跡を調査すると、段丘の縁辺部や先端部に立地するものが一般的であるが、上片貝・弥生式土山などのような規模の大きな遺跡は、台地上一帯に遺物の散布がおよんでいる。小栗岡・楳田・高栗・平沢の須恵器窯址と、小栗岡原奇地の縁辺部斜面にあり、また他の須恵器・土師器出土地は、比較的低い場所の平坦部に存在する。

以上の遺跡のうち、須恵器窯址や骸骨器出土地などをのぞいた、他のほとんどすべては、いわゆる居住地であったと思われる。そして、真人・大平からは竪穴住居址が、また谷内・中平

や木津・大清水では住居址に付随すると思われる石囲炉が発見されていることなどからあきらかのように、これらの居住址には、おそらくなんらかの住居址が一般的に存在したと思われる。したがって、これらの居住址に遺跡は、ひろい意味での集落址と考えることが可能である。

時期的にみると、縄文時代中期の遺跡が圧倒的に多く、四五ヶ所をかぞえる。宮脇遺跡のような山間部、あるいは大平や中平のごとき高位段丘に集落がいたまされたのは、この時期のことであり、集落の増加が新しい土地への進出と結びついていたことを物語っている。早期・前期の遺跡は、僅かに数ヶ所をかぞえるのみで、その規模は小さく、その遺物も乏しい。ここには、さわめて小さな集落が、ごく短期間いたまされたにすぎなかつたのであろう。中期のそれとくらべて、いちぢるしい対照的である。一方、後期の遺跡は、二の敷か所あり、中期に比べて多い。比較的低い段丘上に立地し、規模の大きなものがあがった。上流の真人・山辺地区には、後期・古・中への時期のものもほとんどであるが、宮脇一のみは、それより下流の段丘が広くひろげられた地域に限られていた。この傾向は、晩期の場合も共通である。約10カ所の晩期の遺跡は、その大部分が他の段丘上にあり、なかでも片貝・野原の二ヶ所は、漆塗木器などが出土していることでも知られるように、低合層が低湿地にまでおよんでいる。

三仏生・清水上遺跡からは、弥生式土器等が発見されている。この遺跡は、まえにもふれたように縄文時代のものである。

であり、その住居遺構なども発掘されているが、弥生時代の遺物は寧ろ細であり、もし集落址があったにしても、規模はきわめて小さく、存続期間も短かかったろう。なお、『新潟県に於ける古器時代遺蹟調査報告』によると、真人・三木明および小千谷郡付近から、弥生式土器が出土したところになっているが、これらは何處なるにいかんが、

須原野等川上流部、即ち、前記の遺跡より、約一キロにわたる小千谷川沿いの平野に、弥生式土器の出土地が散在し、彌生式土器の出土地が、弥生時代の遺跡であることが、時常見出される。また、日本文獻上に、小千谷川沿いの遺跡があり、同地を見れば、彌生時代の遺跡が、おおよそ自然に於いて、疎離して存在するものである。

#### 四 主要な遺跡

前記の天保元年二月三日の御目付にあり、私どもは小千谷市古川といふ所の遺跡を調査した。ここはその主要なものをもとりにして、簡単に説明をしよう(第一圖)。

##### a. 千原遺跡(第一圖)

旧真人村字坂にあり、かつて大淵吉司氏によって埴原文土器や、織維垣のある羽状縄文の土器などが採集された場所である。段丘上の縁辺に近い部分にあり、かたわらに小さな谷をひかえている。標高約一五〇メートル。現在は水田と雑木林になっているが、遺物の散布はほとんどまったくみられない。おそらく、きわめて小規模な遺跡であつたのだろう。付近には、上蟹沢、雪峠の下、稲荷堂、墓地の下、開農、観音堂前、上ノ原などの

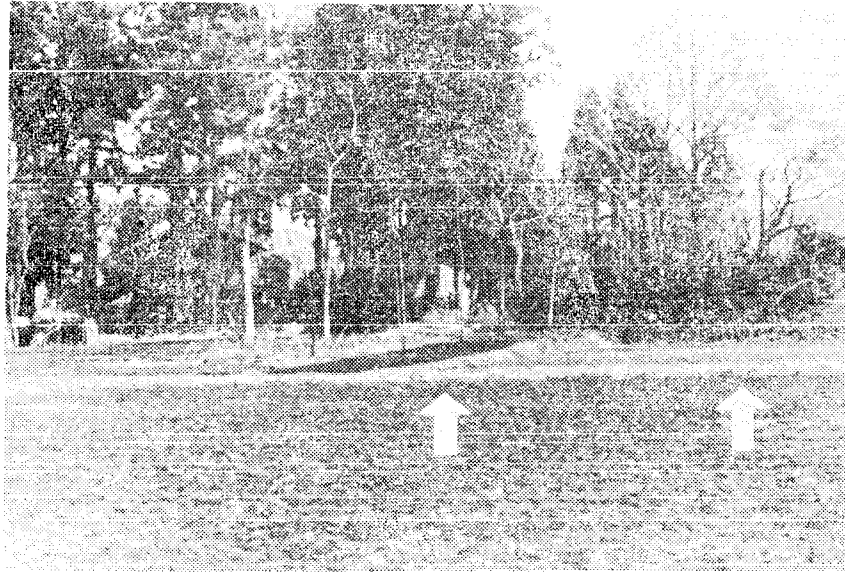
遺跡が密集している。

##### b. 本田遺跡

旧川井村川本田にある。信濃川が大きく蛇行した部分に、古世の段丘がはり出しているが、遺跡は下から三段目の段丘の縁部位置に散在し、標高約一〇〇メートルを数える。山形・高田・駒子川の文様ある埴原文土器、川戸下層式土器・田戸上層式土器、土器の表裏に交差する土器、織維垣のある羽状縄文の土器、遺跡を式目より千原遺跡の遺跡より、約一キロにわたる小千谷川沿いの平野に、彌生式土器の出土地が散在し、彌生時代の遺跡であることが、時常見出される。また、日本文獻上に、小千谷川沿いの遺跡があり、同地を見れば、彌生時代の遺跡が、おおよそ自然に於いて、疎離して存在するものである。

##### c. 明神遺跡(第二圖)

彌原川に注ぐ小千谷川の先端部にあり、眼下には信濃川の濁流が渦を巻いている。くわしくは上戸見町土村に属する。信濃大明神をまつる碑のあるところから、遺跡の名が生れたらしい。縄文時代後期・晩期の各種の遺物をを量に出し、重要な遺跡として注目される。また、この遺跡をのせる標高約七〇メートル、比高約二〇メートル)は、信濃川の河流が直接ぶつかる、いわゆる攻撃斜面にあたり、年々浸蝕が進んでいる。地元の人々の言によれば、一年に一メートル以上の巾の土地が失われていくとのことである。現在、浸蝕の進んでいる断崖の上部には、



第6図 千谷園林の破骨器出土地点(左)と埴原文土器のある塚(右)

厚い黒土からなる遺物包含層が露出している。自然の作用で遺跡が破壊されていくという状況をまのあたりにして、私たちはつよい印象をおぼえた。この遺跡の背後の門みをへだてた広い台地上には、縄文時代中期・後期の遺物が多数出土する。安達吉治氏は矢原遺跡とよんで、いちおう前者と区別している。

##### d. 権田窪址(第4圖)

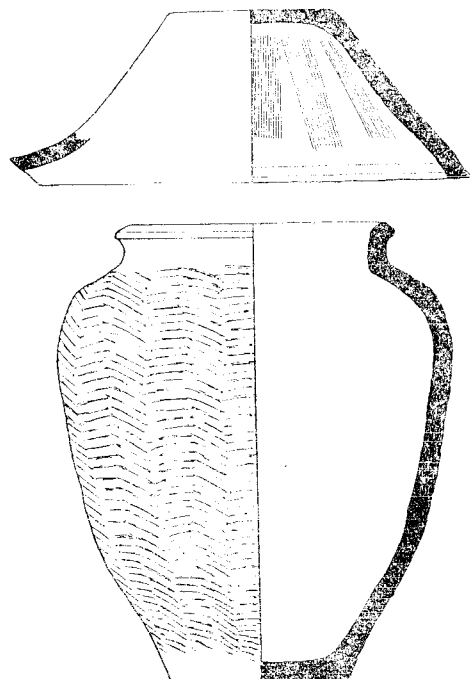
小千谷市街の北方に孤立したような状態の大きな台地がみえる。この平坦な台地は小栗田原とよばれ、かつて日本陸軍の飛行場が建設された。この台地の周縁には、須原野の遺跡がのこされており、安達氏は二、三方所の存在を認識している。私たちは、そのうちの一つ権田窪址を訪れた。これは台地のはげ西南端にあり、周囲の水田との比高一二メートルの斜面にきすかれています。白色の粘土の堆積が小さな山となつてのこっているのが認められた。付近には若干の須原野片が散布している。この築址から出土する須原野とほぼ同形式とみられるものが、小栗田地区から発見されている(第4圖下)。

##### e. 箱清水遺跡(第5圖)

小栗田の須田春治氏は、硬質頁岩製の大形の石刃(Mlade)四個を所有している。これは、いまから約四〇年前、箱清水において農地を開墾するさい出土したものであるといわれる。その場所は、小栗田原台地の東南端の斜面上部に位し、前面に沖積地がひらけている。比高約三〇メートル。現在は萱場となっているが、遺物の散布はまったくみとめられない。この大形石刃は、縄文時代以前の所産と考えることができよう。

f、岡林蔵骨器出土地(第6図)

昭和二十二年六月二十八日、千谷岡林において偶然の機会に拵鉢(須恵質陶器)で蓋された須恵器の壺が発見された。注意すべきことに、このなかにはさらに、銅製の宝篋印塔形蔵骨器が納められていた(第8図)。宝篋印塔形蔵骨器は、全長三・センチ、遺尊神門五十一歳、白口口、嘉曆二年(974)六月十二日、午時(神坂)の黒書銘があり、きわめて貴重な資料ゆえに、昭和二十二年文化財保護委員会によって買上げられ、国藏品となった。いま、地主・発見者の岡元清氏宅には、拵鉢と壺の二つの陶器が保存されているが、これは新潟県下にみられる中世の蔵骨器



第7図 岡林出土の蔵骨陶器 (岡元清氏蔵) 縮尺6分の1

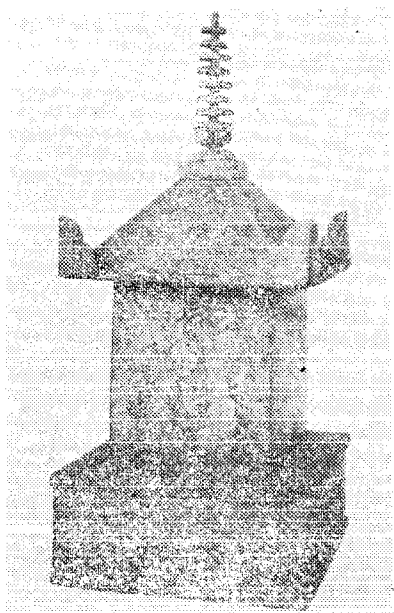
とは同じである。壺の内面に朱漆を塗っていることなどが注目される。この蔵骨器の発見された場所は、ほぼ平坦な地形のところであるが、部分的に心もち高くなっているのは、かつて小さな塚をかたちづくっていたためであろうか。これに南接して、直径数メートル、高さ二メートルほどのマウンドがある。この上には、四個の梵字碑が立っており、それには貞和六年などの銘が刻まれている(第9図)。

g、三依生遺跡

旧子田村三依生にある。この付近に発達した第二段丘の平坦面には浅い細長い谷が刻まれているが、遺跡はこの谷にのびて立地する。標高約五〇メートル、比高約六メートル。遺物の散布は、かなり広い範囲におよんでいる。縄文時代早期(擦型文土器)、中期、後期、晩期の各時期の遺物を出し、またアメリカ式石鏃や弥生式土器片も発見されている。またにも述べたように、昭和三十年、中村幸三郎・寺村光晴氏等による発掘調査がおこなわれ、すでにその報告書も刊行されているので、ここにくわしく紹介する必要もない。遺跡の一部にある「タカハツラ」の湧水は、集落をいとなむ上で欠くことのできない役割を果たしたと思われる。

h、上ノ山遺跡

小千谷市街の南部によこたわる船岡山丘陵は、その一部が西方にひろがって、標高七〇メートル



第8図 岡林発見の銅製宝篋印塔形蔵骨器(高さ31cm)

ル前後の台地をつくっている。この部分に上ノ山町があり、遺跡は道路をへだてて左右にまたがっている。現在この付近一帯は住居が建てこんでおり、僅かの空地に遺物の散布をみることもができるのみである。かつて安達氏は、台地の西側縁部から数個の大形深鉢形土器を採集されたが、これはその出土の状態より推して、竊棺ではなかったかと考えられる。土器は縄文時代晩期前半に属するものである。ほかに、後期・晩期の遺物が数多く発見されている。



第9図

岡林所在の貞和六年銘のある梵字碑

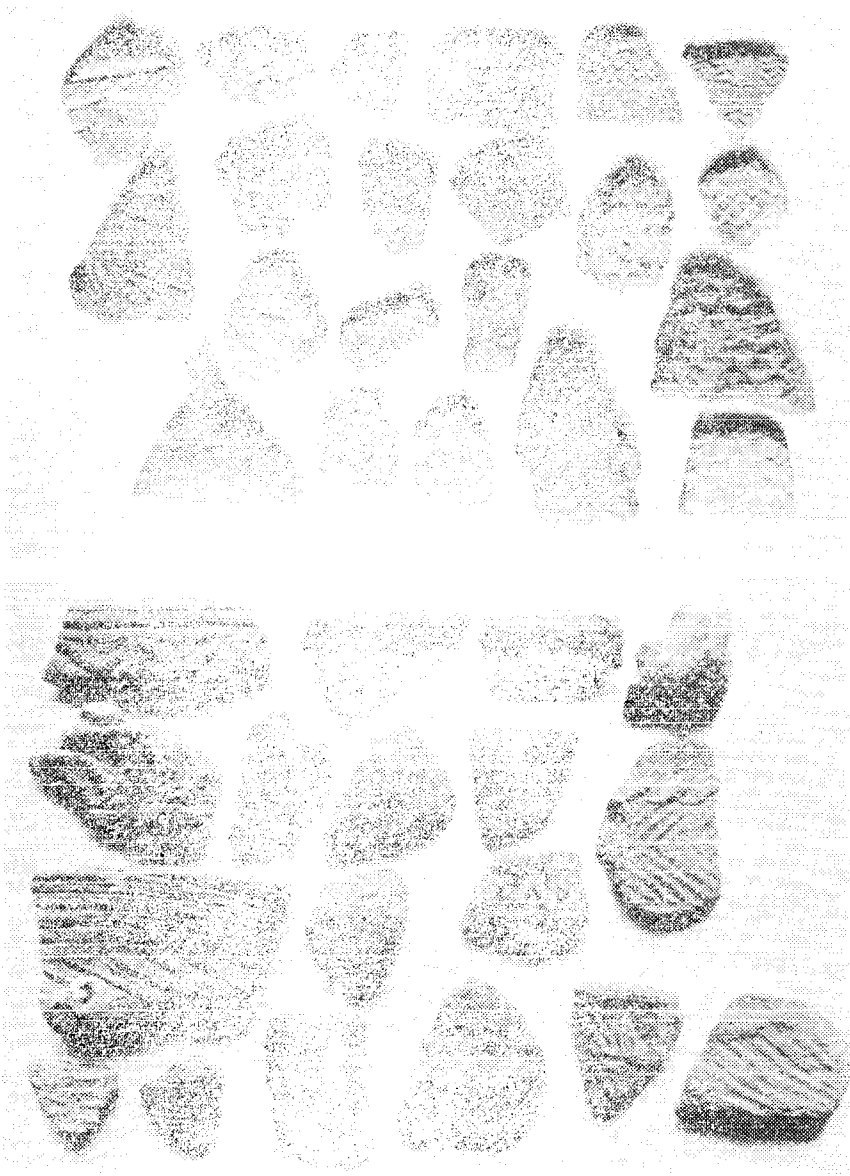
五 遺物の様相

つぎに出土した遺物について、時代別に概観してみよう。

a、無土器時代

信濃川流域には、かなり多くの無土器時代(縄文以前)の遺跡が知られている。なかでも、中魚沼郡津南町神山遺跡、同じ坂遺跡、および北魚沼郡用口町荒屋遺跡などが有名である。小千谷市内には、いままでもこの時代のたしかな資料は報告されていない。しかし、このたび私たちが接した小栗田・館清水の石刃は、偶然の発見品であるから、その出土の状態などはわからないが、形態や製作技術から推して、無土器時代のものと考えることができる(第5図下)。石刃は、長さ一〇センチをこ





第10圖 信濃川流域出土の土器 (安達清治氏蔵)

える大形のもので、側縁に使用痕がある。硬質頁岩製らしい。なお、ほかに二、三の場所で無土器時代のものではないかとみられる石器が発見されているが、確証はない。今後の目的的な調査によって、この時代の遺跡遺物がさらにいっそうあきらかにされうる公算は大きい。

b、縄文時代

縄文時代の遺物でも、とても古いのは、捺型文土器である。はやくから注意されていた芋坂・下蟹沢の捺型文土器(帯を圖下)は、捺間文をあらわし、また文様帯の上下に平行線を配することと特徴的である。これは、川井・本田出土の捺型文土器(第10圖上)の一部(山形文・格子目文)にくらべると、相對的に新しい。また、他の一部(捺間文)は、文様の単位が大きく、三仏生・清水上流見の捺型文土器に類似している。芋取例はこれより時期的に古いだろう。したがって、この地域の捺型文土器には、本田Ⅰ—芋坂—本田Ⅱの三つの時期的な差が考えられる。本田Ⅰに属する捺間文は、津南町卯ノ木遺跡の類品に對比されるであろう。川井・本田や芋坂・上蟹沢からは、貝殻腹縁文の土器が出ていて、これらは関東地方の川井土層式に併行するものである(第10圖上)。おそらく捺型文土器の直後に位置づけられる。ほかに、早期の土器としては、表裏に貝殻条痕文を有するものが一片、本田遺跡から採集されている。茅山式併行のものと思われる。また、捺糸文をもつ土器片などもみられるが、時期は不詳である。以上の早期の資料は、いずれも断片的なもので、石器の伴存関係なども不明である。

前期の土器は、芋坂・下蟹沢、同・上蟹沢、坪野・雪峠ノ下、川井・本田などから出土しているが、これまた断片的な資料であり、多くを語ることはできない。このうち、繊維痕のある粗状縄文の土器は、刈羽郡刈羽貝塚の主体をなす土器にひとしい。また、諸磯a式、同c式、十三番提式と認定される土器は、信濃川をさかのぼった長野県の土器と類縁が考えられる。川井・本田出土の三角形の石七は、この時期のものであろう(第10圖上)。ほかに伴出遺物は知られていない。

中期以降の資料はいたって多い。中期の「古い」時期に属する土器は、おおむね新潟県下で御野B式などとはばれているものに含まれる。山本や千谷・鶴ヶ丘からは、良好な資料が出ている。この直後の時期のものは不明であるが、関東地方の加曾利BⅠ式土器に併行のもの、ならびにいわれる馬高式土器は、かなり多い。口縁に裝飾にとんだ大きな把手をもつ馬高式土器は、信濃川流域に分布の中心をもつものであり、この地域において古の位置は大きい。山谷・前野はその代表的な遺跡である(同敷一)。中期の「新」としたものは、従来塔ヶ崎式の名でよびおてきた土器で、関東地方の加曾利BⅡ式、同Ⅲ式に相当する。中期のうちでも、とりわけこの時期のものが最も多く、小千谷古城址もとより、信濃川流域の各所で発見されている。打製石斧を比較的多くともなう点に注意したい。

後期のはじめに位置づけられる三十稲場式土器は、馬高式とおなじく、信濃川流域を基盤として発達した地方的な土器である。特殊な刺突文によって特徴づけられるこの土器は、上片貝・矢

原や中子・元中子の遺跡から典型的な資料が出土している(図版二)。しかし、正式な発掘調査のおこなわれたことがなく、多くの不明な点をのこしている。三十稲場式と三仏生式との間には、上片貝・明神出土の一部の土器などが介在すると思われるが、その資料はいたって少ない。三仏生式土器は、後期の「中」を代表する土器であり、その発見地はかなり多い。標式遺跡の三仏生・清水上からは、底部に多数の孔をもつ甗様土器が発見され、中村孝三郎・寺村重晴両氏によって問題としてとりあげられた。また、真中にくびれをもつ鐘石状の石器は、上ノ山などからも採集されており、この時期の特殊な遺物として注目してよいだろう。後期「新」の土器は、東北地方の影響下に生れたもので、独特な磨滑縄文および縹文をもつ。いままでの土器に、多かれ少かれ認められた地方性が否定され、より普遍的(東北的)なものに組みこまれていった事情を注意しなければならぬ。上片貝・明神や上ノ山などからは、立派な資料が発見されている(図版三)。

晩期の土器をそれにあらわされる文化は、後期「新」の基礎を踏襲して成立したと思われる。つまり、ここにも東北地方の影響をつよくみるからである。上片貝・明神、上ノ山、片貝・町夷などの晩期の土器は、それがいわゆる単式土器の系群に属するものであることを、はつきりと物語っている。よく、町夷出土の漆塗木器や土器などは、その端的なあらわれである。一部の粗製土器の上には、若干の地方性が感じられなくもないが、しかしその度はいたってよい。磨製石斧、各種の石

古代・中世の遺物は、ほぼ小千谷市街を中心とした地域に多い。

### 六 おわりに

悠久な流れをつづける信濃川は、それにふさわしいような人間の歴史をはぐくんできた。いま私たちは、視点を中流域の一部、小千谷市域にすえて、その遺跡遺物をおおまかではあるが、ながめてきた。

おそらく万の単位をもつて数えられるであろう、無土器時代のことについては、ただその存在を知るのみであった。縄文時代の文化には、皮相的ない方ではあるが、川の流れるように長野県方面から下ってきたものもあったし、また逆に川をさかのぼってきた北からの文化の影響もつよかった。しかし、それにもまして指摘されるのは、この川の流域を中心に独自の発展をとげた文化のことである。「馬高岡」、「三十稲場」、「三仏生」の名で代表される中期後期の縄文文化は、もちろん狩猟・漁撈・植物採集などによってささえられたものであるが、信濃川の不變の流れにかかわらず、それぞれに異なった筆を咲かせたのはながであつたか。与えられた資料を整理し、問題点をふかめ、発掘という手段をとおして解決へとせまらねばならない。

米の文化、つまり弥生文化が、この川の流域に根をおろすのは容易なことではなかつたろう。低い農耕技術しかもたないこの時代の人たちにとって、大部分の土地(段丘)はほとんど価値のないものであつた。住む人はきわめて少なかつたし、またその期間も短かつたと考えられる。それにしても、そこでか

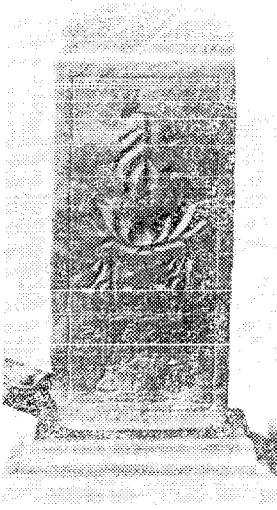
鍬などのほかに環石、多頭石斧等がともなう。

### c、弥生時代

弥生時代の遺物としては、三仏生・清水上の僅かな出土品があげられるのみである。近藤勘治郎氏の採集による若干の土器片と、いわゆるアメリカ式石鍬がそれであるが、詳しいことはわからない。

### d、歴史時代

古墳時代に位置づけられる遺物は、いまのところ見出されていない。この時代はいわば空白の時代である。小栗田地区などで発見されている須恵器・土師器は、大部分が平安時代ころのものに推定される(第4図下)。須恵器には坏および蓋が多い。坏の底部は平底を呈し、器面にけろくろ痕をのこす。蓋には低いつまみがつく。土師器に属するものには、甕が知られているが、その数は少ない。中世の遺物としては、千谷・岡林の蔵骨器や梵字碑があり、また水口の吉田氏宅には、付近から出土した貞和三年銘の緑泥片岩製の板碑が所蔵されている(第11図)。



第11図 水口所在の貞和三年銘ある板碑(吉田氏蔵)

れらは、たとえ一時的にしろどのような生活を送っていたのであろうか。興味はふかい。今日のそれにつながる村をつくり、田をきりひらいていったのは、須恵器・土師器の使用者たちであつたと思う。かれらは久しい空白の時代ののちに登場するが、より高い農業技術にささえられて、耕地を拡大し、生産を高めていったにちがいない。「千屋郷」はかれらの故郷であつた。

こうしたイメージをさらに具体的に肉付けし、正しく歴史叙述するためのひとつの手がかりとして、私たちはあえてこの報告を書いた。最後に、一言つけくわえて弁明としたいのである。

注(1) 若林勝那「越後国三島西部蒲原両郡石器出土所地名表」

東京人類学会雑誌八卷八八号。

大野延太郎「越後旅行見聞録(石器時代古物遺跡の部)」

東京人類学会雑誌一六卷一七六号。

江見忠功他「石器時代古物遺跡発見地名表」東京

人類学会雑誌一九卷二一八号。

佐々木船山「新発見の石器時代遺物」東京人類学会雜

誌二四卷二七七号。

(2) 魚沼無口「越後に於ける有史以前の住民及びその遺物」

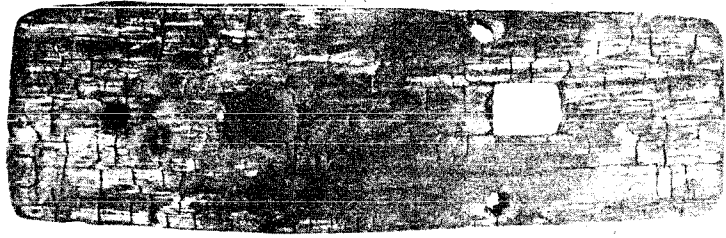
「国学院雑誌二二卷一二号」。

大泉久四郎「越後に於ける石器時代遺跡遺物」人類学

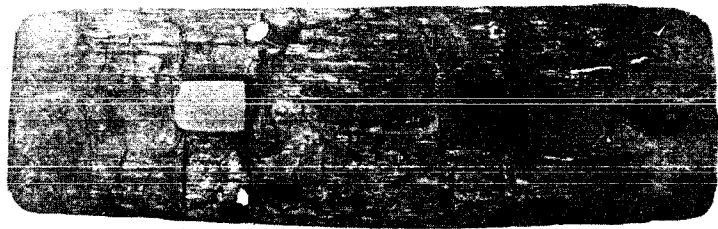
雑誌三〇卷二号

「大泉久四郎君よりの報告」人類学雑誌三〇卷四号。

(3) 八幡一郎「越後中魚沼郡宇坂の土器略報」人類学雑誌



露印下駄 (出土品)  
富山県婦負郡呉羽町中沖字宝俵 高瀬 保 (所蔵)



露卯下駄 (出土品)  
富山県婦負郡呉羽町中沖字宝俵 高瀬 保 (所蔵)



露卯下駄  
富山県婦負郡呉羽町中沖字宝俵 高瀬 保 (所蔵)

五一卷一七号。

- (4) 中村孝三郎・寺村光晴他『三仏生』長岡市立科学博物館 昭和三十三年。
- (5) 上原甲子郎・雅名仙草他『大聖遺跡』小千谷市教育委員会 昭和三十三年。
- (6) 『中部考古学会第二回大会での祝辞』中部考古学会会報 三十三年五報。
- (7) 中村孝三郎『馬高』長岡市立科学博物館 昭和三十三年。
- (8) 中村孝三郎・寺村光晴他『三仏生』長岡市立科学博物館 昭和三十三年。
- (9) 中村孝三郎『新潟県中魚沼郡津南町卯ノ木押型文遺跡』考古学雑誌四三卷三三号。
- (10) 八幡一郎『胡剝貝塚』北方文化博物館 昭和三十三年。
- (11) 中村孝三郎・寺村光晴『縄文文化に於ける甕様土器』考古学雑誌四二卷一七号。

図版解説

- 1 山本、山本出土 (高さ11 cm)
- 2 山谷、前野出土 (高さ17 cm)
- 3 土片貝、矢原出土 (高さ28 cm)
- 4 山谷、前野出土 (高さ30 cm)
- 5 // (高さ30 cm)
- 6 土片貝、矢原出土 (高さ28 cm)
- 1 中子、元中子出土 (高さ37 cm)
- 2 土片貝、明神出土 (高さ55 cm)
- 3 // (高さ12 cm)
- 4 上ノ山、上ノ山出土 (高さ17 cm)
- 5 // (高さ7 cm)
- 6 高梨、青池出土 (高さ10 cm)